

1605年慶長大津波に関する阿波国宍喰の地震・津波記録の検討

神戸大学名誉教授 石橋 克彦*

Examination of an Earthquake and Tsunami Record at *Shishikui* in Southeast Shikoku, Japan, concerning the 1605 Keicho Great Tsunami

Katsuhiko ISHIBASHI

Emeritus Professor, Kobe University

A historical record at *Shishikui* in southeast Shikoku concerning the 1605 Keicho great tsunami on the Pacific coast of central and southwest Japan has been examined. The record, which is widely regarded as a transcription of a contemporary document of the tsunami, says that strong tremors continuously occurred in the daytime before the tsunami at night, suggesting that a remarkable swarm activity of large earthquakes preceded the tsunami generation. It is a very interesting and scarce information for investigating the generating mechanism of the 1605 tsunami because reliable historical documents on this event are rare in Shikoku. However, seven contemporary diaries in Kyoto, about 210 km away from *Shishikui*, have no description of earthquake ground motion at all on that day, whereas even M 5-class moderate earthquakes recently observed around *Shishikui* produced considerable ground motion in Kyoto. Therefore, the description of the continuous large earthquakes before the tsunami is doubtful. Moreover, the tsunami occurrence time written in the *Shishikui* record is inconsistent with the time shown by other records, and the death toll of the tsunami seems too high compared with the estimated population of *Shishikui* at that time. In addition, the way of writing of the record as a whole looks confused to a considerable extent. Consequently, I conclude that the record at *Shishikui* may not be contemporary and is unreliable.

Keywords: Historical Tsunami Record, 1605 Keicho Tsunami, *Shishikui*, Historical Source Criticism.

§ 1. はじめに

慶長九年十二月十六日(グレゴリオ暦1605年2月3日)の夜、房総半島から鹿児島県までの太平洋岸を大津波が襲った[例えば、宇佐美・他(2013)、石橋(2014);図1参照]. この事象に関して、紀伊半島以西では地震動を具体的に記した同時代史料がほとんどなく、京都は無感だったと推定されている[例えば、石橋(1983, 2014)、山本・萩原(1995)].

唯一、阿波国宍喰くしくい(徳島県最南部、現海陽町;図1)に同時代記録の写しとされている史料があり、それには当日8~15時頃に大地震が続いたように書かれている。石橋(1983)はこれを重視して、当日朝から夕方まで宍喰直下付近のフィリピン海プレート上面深部で先駆的な群発地震活動が起こり、その夜、四国沖~御前崎沖のプレート境界浅部の南海トラフ軸に近いところで巨大津波地震(地震波を強く出さないで大津波を起こす地震)が発生したという地震像を提案した。その後石橋・原田(2013)は、本津波は小笠原海溝沿いの巨大地震によるという作業仮説

を提唱したが、そこでは宍喰の地震記録は考慮されなかった。

このように、宍喰の史料は本事象の実体を理解するための重要な鍵だといえる。しかし、この史料については、山本・萩原(1995)がある程度取り上げているが、不十分である。そこで本稿で詳しく検討する。

§ 2. 慶長九年大津波時の京都の地震動

宍喰の地震・津波史料をみる前に、慶長九年十二月十六日の大津波の際に京都で地震動を感じていなかったことを再確認しておこう。

そもそも、この日に確実な地震動災害は記録されていない。例えば『理科年表』の「日本付近のおもな被害地震年代表」が、平成29年版[瀬瀬(2016)]まで本事象について「地震の被害としては淡路島安坂村千光寺の諸堂倒れ、仏像が飛散したとあるのみ」と書いていたが、石橋(1983, 1989)がこの震害について、1825年に完成した郷土誌『淡路草』の誤記で、1596年の文禄五年近畿大地震のことである可能性が高い

* 神戸市在住
電子メール: ishi @kobe-u.ac.jp

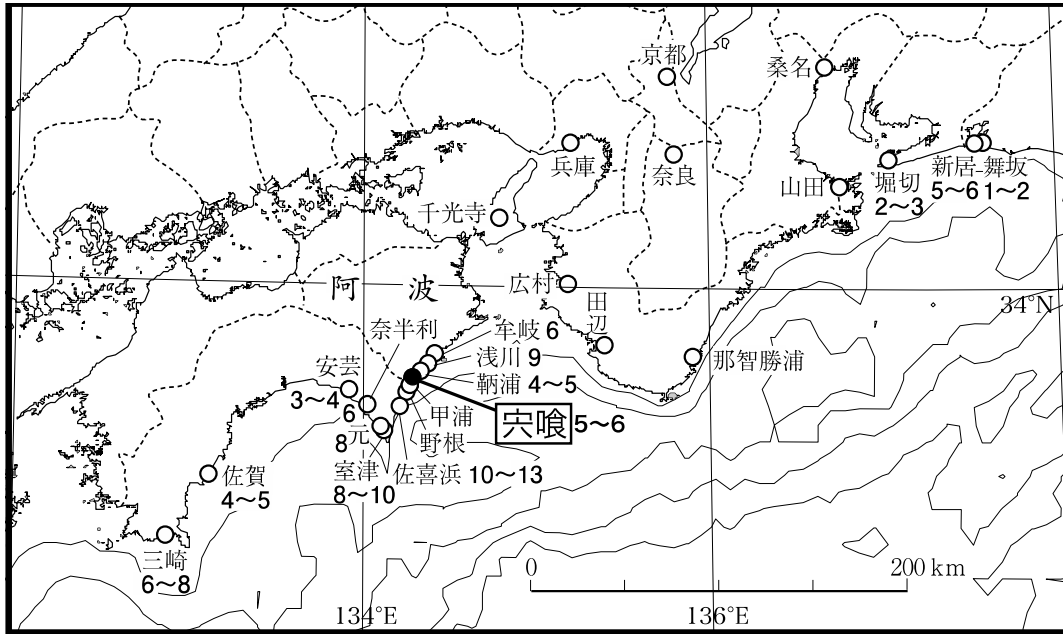


図 1 宍喰の位置と 1605 年慶長大津波の津波高(太数字, m; 伊豆半島以東と鹿児島県を除く). 陸域の破線は旧国界, 海域の曲線は 200m および 1000m ごとの等深線. 石橋(2014)の図 1-11 の一部のデザインを改変.
 Fig. 1. Location of *Shishikui* and tsunami heights (in meter) of the 1605 Keicho great tsunami. Modified from Ishibashi's (2014) Fig. 1-11.

と指摘していた. なお, 平成30年版の同表からは「震害の記録は見当たらない」に変わった.

京都が無感というのは、『義演准后<ぎえんじゅごう>日記』(醍醐寺座主<ぎす>義演の日記)が慶長十年正月六日の条[酒井(2006)]で, 前年十二月十五日(十六日の誤記か?)の江戸辺の大地震の伝聞を記し, 「此邊不覚, 誠聊引震歟(この辺では感じなかった, 本当は少しは揺れたのか)と述べていることから推測できる. 同日記の慶長九年十二月十六日の条とその前後[弥永・副島(1985)]には確かに地震の揺れの記事はない.

さらに当時の京都の日記6点を見ると, 無感としてよいことが確認できる. それらは、『言経<ときつね>卿記』(権中納言・山科言経の日記)[東京大学史料編纂所(1987)], 『御湯殿上<おゆどのうえの>日記』(皇居内の御湯殿上という部屋で天皇近侍の女官らが書き継いだ職掌日記)[埴・太田(1958)], 『慶長日件録』(大学寮の教官である明経博士<みょうぎょうはかせ>舟橋秀賢<ふなはしひでかた>の日記)[山本(1981)], 『時慶<ときよし>記』(参議西洞院<にしのとしいん>時慶の日記)[時慶記研究会(2008)], 『舜旧記<しゅんきゅうき>』(神道家で豊国<とよくに>神社の神宮寺別当だった梵舜<ぼんしゅん>の日記)[鎌田(1973)], 『鹿苑<ろくおん>日録』(相国寺<しょうこくじ>の歴代の鹿苑院主の日記)[辻(1935)]である. これらの日記は, 他の地震の

記事を含んでいるから記主が地震に無関心なわけではないが, 十二月十六日前後に地震記事はない(唯一, 『時慶記』が十四日夜の地震を記す).

宇佐美・他(2013)は「京都で有感を示すものは『当代記』のみ」と述べているが, これは誤りであろう. 『当代記』は, 織豊期～慶長二十年の編年的記録で, 徳川政権に近い者がさまざまな情報を17世紀前半にまとめたと考えられており, とくに後半部分は同時代的な重要史料である. しかし, 「十六日戌刻, 丑寅之方に魂打三度, 同地震」で始まる本地震・津波の記事[国書刊行會(1911)]の前後の天候の記述を京都の同時代日記と較べると, 地震時の記録拠点が京都でないことはほぼ確実だと思われる.

以上のとおり, 慶長九年十二月十六日とその前後には京都では地震の揺れが感じられなかった.

§ 3. 宍喰の慶長九年大津波の史料

既刊地震史料集には宍喰の記録が複数収録されているが, 整理されていない. 例えば『日本の歴史地震史料』拾遺[宇佐美(1998)]は, 宍喰のかなりの史料を紹介した『徳島の地震津波一歴史資料から一』[猪井・他(1982)]の本文をそのまま掲載しているので, 史料の区別がわかりにくい. そして重要な史料が漏れている. [古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版)[古代中世地震史料研究会(2017)]も,

本事象は未校正であるために史料の実体がつかみにくい。そこでまず史料を整理して、慶長九年大津波の宍喰の史料として以下を抽出した。

史料1 『円頓寺開山住持有慶之旧記』中の『慶長九年十二月十六日大變年代書記』: 元文四年(1739)春に宍喰の円頓寺<えんどじ>の鼠の巢の中から慶長～寛永頃の旧記類が見つかり、それを原本どおりに書写したとされるのが『円頓寺開山住持有慶之旧記』で(以下、『宍喰之旧記』と略記)、その中に慶長九年浪災の詳しい記録『慶長九年十二月十六日大變年代書記』がある(以下、『大變年代書記』と略記)。宍喰の大日寺が所蔵しているという[猪井・他(1982)]。円頓寺は大正元年(1912)に大日寺に合併された[宍喰町教育委員会(1986)]。猪井・他(1982;p.130)と徳島県南海地震史料調査委員会(2017)が翻刻を掲載し、宍喰町教育委員会(1986;p.180)が現代語訳を示している。

史料2 『慶長九年大變年代書記』: 史料1の『大變年代書記』とほとんど同文だが、別個に伝存しているらしい。1976年頃に大日寺で見つかったもので、巻紙1巻、元文四年に真福寺・大雲が書写した(これも史料1と同じ)という付け紙があるという[猪井(1976)]。猪井(1976)と猪井・他(1982;p.150)が翻刻を掲げ、山本・萩原(1995)は写真を掲載している。

史料3 『円頓寺御建立成来旧記之事』: 慶長三年(1598)に徳島藩から駄路寺<えきろじ>(旅人への便宜供与と監視を兼ねた寺)に指定された円頓寺[例えば、宍喰町教育委員会(1986)]の住侶・快巖が慶長四年に書いた1枚ものの成来記<なりきたりき>で、裏面に慶長九年大津波直後の様子が少し書かれている。当時久保村(宍喰の北隣)の庄屋だった多田家に所蔵されているという。猪井・他(1982;p.210)と宍喰町教育委員会(1986;p.174)が翻刻を掲げている。

史料4 『大日旧記聞書』: 大日寺住持が享保六年(1721)に書いたもので、慶長津波に多少言及している。猪井・他(1982;p.155)が翻刻を掲げている。

史料5 『真福寺住僧大雲拜書』: 宍喰の真福寺の住僧・大雲が元文二年(1737)に書いた。30年前の宝永地震津波を簡単に記述し、慶長津波にも言及している。猪井・他(1982;p.171)に翻刻がある。

史料6 『宍喰浦舊記』: 阿波出身の明治期の国学者・小杉楯邨<すぎむら>が編纂した史料集[小杉(1913)]の一部の『徴古雑抄続編』が載せている。永正九年から宝永四年までを記しており、小杉が安政四年(1857)三月に市原榮壽(人物不詳)の蔵本を写

したものである。あちこちに転載されているが、史料1などにもとづく二次史料と判断される[石橋(2018)]。

史料7 『震潮記』中の『慶長九年師走十六日震汐圓頓寺旧記之写』: 『震潮記』は略称で、正式名称は『永正九年八月四日慶長九年十二月十六日寶永四年十月四日嘉永七寅年十一月五日四ケ度之震潮記』である。宍喰の旧家田井<たい>家の十代目当主で大庄屋を勤めた久左衛門宣辰<のぶたつ?>が、1854年安政南海地震津波の実体験と伝聞情報を詳細に記すとともに、その前に、永正九年、慶長九年、宝永四年の津波・洪浪災害に関する地元の古記録を書写して加えた[例えば、猪井・他(1982)、田井(2006)]。しかし、慶長九年分は表題どおり史料1(ないし2)を写したもので(末尾に史料6系統の記事も含む)、二次史料である。

他にも、以上の抄録のようなものを含む史料があるが、省略する。以上のなかで慶長九年津波の同時代史料の写しとされているものは**史料1**だけなので(**史料2**も同じものだとみなせる)、以下では**史料1**を検討する。なお、**史料5**を関連部分で参照する。

§4. 『大變年代書記』の問題点

図2に猪井・他(1982)にもとづき、『宍喰之旧記』の始めから、その中の『大變年代書記』(図2の1頁目下段の二重傍線から)が終わるところまでを示す。徳島県南海地震史料調査委員会(2017)も参考にした。

『大變年代書記』は、慶長九年大津波を直接体験した円頓寺住持・宍喰<ゆうけい>(当時26歳)が、被災直後に数度に分けて筆記したものを、慶長十年正月二十一日に纏めたと書かれている(冒頭;「乙巳」が慶長十年)。そうであれば、心身の衝撃・疲労と混乱のなかで思い違いなどが生ずるかもしれないが、基本的には生々しい体験・見聞が鮮明で、事実即したことが書かれているはずである。ところが、そのような前提で読むと、かなり不可解な点がある。また、それを含む『宍喰之旧記』に関しても幾つかの疑問がある。以下でそれらを論ずる。

4.1 津波当日昼間の「大地震」に関する疑問

『大變年代書記』によれば、津波当日は「辰半刻(午前8時頃)より申上刻(15時頃)まで大地震にて前代見聞の大変」だった(図2の傍線A)。これはやや曖昧な表現だが、8時頃から15時頃まで大地震が複数続発したと読めるだろう。なぜならば、もし大地震が1回だけだったとすると、それは8時頃に発生して、その

円頓寺開山住持有慶之旧記

元文四己未年の春、駅路山円頓寺開山住持有慶の旧記等、円頓寺の二階の上風の巢の中より取り出し候。其の時々拝見の僧、円頓寺住持嘉明、真福寺住持大雲也。旧記の本紙は円頓寺にこれあり候。旧記本紙の通り相違なく写し取るもの也。時に元文四己未年三月十四日

真福寺 大雲 ㊦
先住有慶の旧記本紙の通り真福寺大雲書き写し申す所相違なきもの也。
元文四己未年三月十四日

円頓寺住持 嘉明 ㊦

円頓寺旧記出る次第目録

一 元文四年二月廿二日申下刻に出る。浦里真言結衆六ヶ寺、正福寺に於て慶長十年正月廿一日の衆評定書通、諸伽陀の余紙に書き記しこれあり候。

一 同年二月廿四日申上刻に出る。慶長九年之大変年代書記、諸加持の余紙に書き記しこれあり候。

一 同年三月六日午の下一刻に出る。当浦成来旧記書之写ならびに諸寺諸社引直し立替り書記、合して巻札、

駅路山住侶寺役帳巻札、
右式札同日に出るなり。

一 同年三月七日の昼出る。

一 浦里真言結衆六ヶ寺之衆評定書通。

一 同年三月八日の昼出る。

一 円頓寺第二世弘秀有慶之隠居之願結衆中より承知書き物書通。

一 同年三月九日の昼出る。古来衆評定書通。
一 同年三月十日の朝出る。当浦里真言宗十月五日三時之法事。
一 右八通 目録 終

一 結衆会合座配臈次の儀は、何寺たりといえども年老次第。但し高官高位の僧の儀は若僧たりといえども上座の筈。諸法あるに付き結衆会合着座のみぎり礼儀た

だして着座すべき事。

右は衆評 件の如し

大日寺 円頓寺 真福寺
西光寺 成福寺 正福寺

右衆評定 慶長十年正月廿一日 正福寺に於て之れを定む
十月法事 大日寺当り

乙巳正月廿一日に相尋ね書き記し候

一 慶長九年十二月十六日大變年代書記

浦里真言結衆、大日寺榮宥、歳三十七歳、真福寺宥真、四十九歳、正福寺宥嚴、五十式、西光寺良雄、四十五、成福寺宥庇、三十四、円頓寺宥慶、二十六、大日寺榮宥の儀は、先に書き記す通、御影おいながら流失召され、いたわしき事と申し暮れ候。之れに仍り正月廿一日に榮宥の為に正福寺に於て宥嚴の志にて五ヶ寺うち寄り廻向申し候。其の頃榮宥の命日廿一日と定め候。

第一

一 当浦慶長九年十二月十六日に【A】辰半刻より申上刻まで大地震にて前代末聞の大変、同【B】酉の上刻月の出の頃より大浪海底すさまじく【C】惣所中の泉より水わき出る所二丈余上り、其の外地さげどろ水わき出、さてさて言語を絶する大變。其の頃面々等も遁去る所、寺より申の方に当り古城の小山有り是れへにげ去る。人数百七十余人なり。それも老人または幼少人は道にて浪に打ちたおされ皆々流死す。ようよう面々も本尊と並寺御建立の御証文、知行折紙一通、御棟札其の外手廻に相当る物迄取りにげ、命からがら遁去り候。長福寺本尊は開山願主東林の本尊をおいにげ、是れより上に在所あり、日比原と申す道筋堤下に、本尊おいながら老人のことゆえ足おそく、終に浪におぼれて死す。

東隣真福寺宥真と拙僧事は、本尊手廻に有る応物を取りにげ、命助かり候。三ヶ寺結衆の内にも大日寺榮宥は一度本尊をおいにげ、又々大師尊像を取りに下り、御影堂のおりだん迄大師をお引塩のみぎりゆえ、終に浪に打ちたおされて流死。御影は長福寺のかいにかかり、其の節惣寺分皆々たおれ申し、山野に宿所三日三夜雪霜に覆、さてさて衆人難儀いたし候なり。なかんづく神変なるかな、当所の両社八幡祇園拜殿迄は皆々流失し、本社之儀は山手へ浪に打ちたおれて林の木にかりあり、其のまま取り立て候。殊に祇園宝物大般若六百軸は、祇園内殿に入り有り皆流失なく、浦里氏子打ち寄せ快喜これに過ぎず候。それより

図2 『宥慶之旧記』の最初から、その中の『大變年代書記』が終わるところまで。次の記録の冒頭2行も付す。猪井・他(1982)によるが、徳島県南海地震史料調査委員会(2017)によって多少修正した。凡例は次頁の最後。(続く)
Fig. 2. Text of Yukei no Kyuki, from the beginning to the end of Taihen Nendai-shoki. After Inoi et al. (1982) with slight revision by Tokushima Prefecture (2017). (to be continued)

国家浦里の祈祷に大般若転読いたしはじめたき旨、有真あい願われ浦里六ヶ寺結衆うち寄り候て、祇園に於て転読致し、正月十一日を定日として修行致し候。あい並ぶ三ヶ寺も皆々浪に打ちたおされ候故とて古道具取りさわぎ□おれ不足申すに付き、日比原の内にて寺山と申す峠にて大松岩本もらい、多田氏庄之助殿より御上へ相窺い、当寺取り立て申され候。ほか寺々へも相応に上より竹木の下々、其の外所へは申すに及ばず、米麦等も涓津より船に積廻し惣分御救い成られ、尤も流失後早々見分奉行参られ候てのうえの事にて、なにか筆に記し残したき事は山々に候へども、言語にも申しがたく、筆にも願わしがたき事なれども、せめては国元への通路の印にあら筆を残し申し候。扱て扱てあわれなることゆえ世の人々驚くべき事。

第二

度目書き記す。八ツ時宥真同道にて町筋にて書く也。

【D】第一山野凌ぎの内ほうろくにて食等煮焼して命をつなぎ申し候。一代一生の内にもかぶりと成りたる事、平生のあやにしきよりも大切なる事の処にとれとれも申したる事に候。古こも迄も流し事ゆえ、大切なる事至極、至極。

一【E】当寺且申流死人数老若四十三人、大日寺且申二十三人、真福寺且申九人、長福寺且申六十一人、里分寺方の且申入り込み死申し候。【F】自他共惣人数一千五百余人と申し候。あわれなる事を見聞いたし翌十七日八ツ時に下り候て見申す所、城山より西北方一面の人の死骸、目も当てられず候。東より北往還道筋へかかり候ても右の通に候。【G】其の節久保の在所の内にも二ヶ所惣つかにいたし死人埋め申し候。其の後地藏石仏あい立て置き候。祇園西手の山ざわなり。

慶長九年十二月十七日 未刻之れを記す

円頓寺 宥真

追つて書き記す。

第三

十九日四ツ時に寺内にて見聞いたし申し候。

一 惣代寺中の諸道具、何に寄らずこんらんに入り込み、地へ打ち埋まり申すことく、所に壹尺或は壹尺五寸、所により式尺三尺も砂に打ち埋まり、惣代の諸道具、在家等も取りませになりて埋□□皆追つて見出し印ある分は持主が取り、印なきは皆々 人の物を我が物とせしなり。当寺とての什物椀等皆々損し候て、寺中に墓所等にかかりあり。真福寺は長福寺うしろ大敷引き廻しこれあり、同真福寺の島の内に入流あり。いたみも少なく、寺はねじれころびかかりこれあり、諸道具

等寺に付いて流れ候や、ちゅつ椀類残り有りて取り集め候。

第四

十九日同刻の時分なり。

一 不思議なることこれあり。当寺什物の大ぐわんす、真福寺什物のくわんす、是れは両寺ともへ寺内の内に砂に埋りこれあり候が、少しもいたみこれなく、【H】十二月廿日七ツ時に掘り出し、大日寺代々の什物多く流失申すよにて候。当所にて、寺中の中にも、正法寺は惣じて本尊等も流失、其の外諸道具何に寄らず失い申し候。町中在家方にも少々宛にてもなにか取り集め申す人もこれあり。又人の物を我が物とせし人数多あるよしにて、【I】越年より明年迄の内、色々のせんぎ事これある事、珍らしき事どもと承り候。

第五

廿二日五ツ時に承り候て書き記すものなり。

一 十五たん十七たんの廻船敷そう日比原在より奥へ入込にて取りさわぎ浜へ出し、其の外小船等は政かちのせき迄にかりあるは人々の力にて手かきにして浜へつき出して扱て扱て大變。【J】翌年の四、五月迄はなにかのさわぎにて候。同廿三日に書き記すもの也。真福寺内にて書く也。

一 真福寺内北の角にて古き茶坪沓つ、十二月廿三日に掘り出し候。殊の外むかし物と申し候。同日

一 当寺は慶長式年の秋建立仰付られ、建立より八年ぶり流失候。同日

一 真福寺は本具寺愛染坊と申す旧跡を引き直しにて宥真代に当寺より一兩年も別に建立召されしよし、両寺とも建立して間もなく流失いたし申し候。

拙僧ことは是れより二十丁ばかり参り円通寺と申す通に居り申し候。宥真の手引にて参り候。

当浦成来旧記書之写

永正十一年正月に書記すとこれあり候

〈以下略〉

凡例：句読点は猪井・他（一九八二）の空白と徳島県南海地震史料調査委員会（二〇一七）の句読点を参考にして石橋が付した。【A】～【J】は傍線番号。網掛け太字は図4ないし本文に出てくる寺社や地名。

図2 続き。

Fig. 2. Continued.

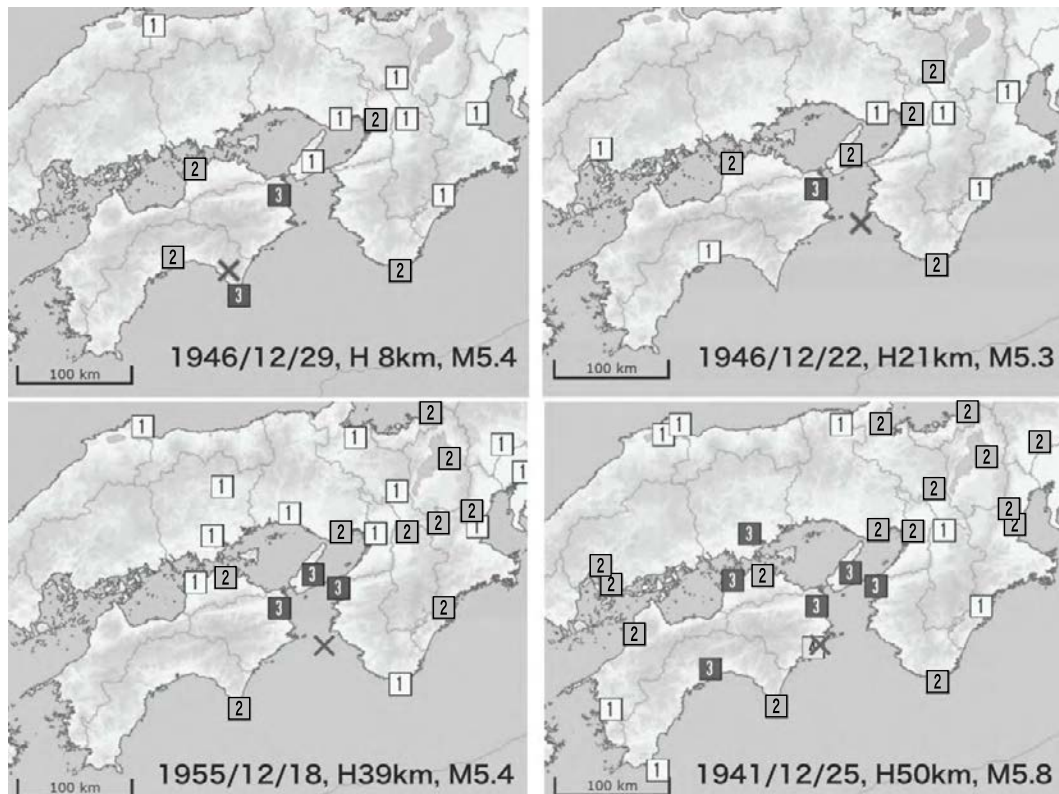


図3 四国東部～紀伊水道の $M5$ クラスの地震による震度分布. 気象庁の「震度データベース検索」による.

Fig. 3. Distributions of seismic intensities (on the JMA scale) due to four $M5$ -class earthquakes in the eastern-Shikoku ~ Kii Channel region (after JMA's Seismic Intensity Database).

影響が「前代未聞の大変」として15時頃まで続いたことになるだろうが(1つの大地震の揺れが7時間も続くことは地震学的にありえないので), 被害は記されていないから何がどのように「大変」だったのか疑問だし, なぜ15時頃で「大変」が終わったのか(津波は次項でみるように17時頃以降とされる), 不可解である. やはり, 8時頃から15時頃まで大地震が続発し, その状況が「前代未聞の大変」だったという意味であろう. 宍喰町教育委員会(1986;p.180)も「辰半刻(午前八時)より, 申ノ上刻(午後三時)まで大地震にて, 前代見聞の大変で,」と読んでいるし, 山本・萩原(1995)も「午前九時頃から揺れの大きい地震が頻繁に生じた」と解釈し, 村上・他(1996)も「午前8時頃より午後3時頃まで大地震があり」としている.

つぎに, どのくらい強い揺れが続いたかが問題になるが, 「大地震」「前代見聞の大変」といながら被害等が書かれていないことから, 震度5程度の揺れが何回か起きたのではないかと推測される.

その程度の強震動をもたらす地震の場所と規模(M)に関しては, 宍喰のごく近傍で, 1965年～67年頃の松代群発地震[例えば, 宇佐美・他(2013)]のような極浅発地震活動が発生すれば, $M5$ 前後でも震

度5程度の揺れが続発するだろう. しかし, 宍喰から少し離れていたり, 石橋(1983)が推測したようなフィリピン海プレート上面やや深部だったりすれば, $M6$ クラスの地震が複数発生した状況が想像される.

ところが, 気象庁「震度データベース検索」(<https://www.data.jma.go.jp/svd/eqdb/data/shindo/index.php>)にもとづいて図3に示したように, 四国東部～紀伊水道地域で発生した地震は, $M5$ クラスであっても京都に有感の揺れをもたらしている(図3の4地震はやや古いので, 震央位置・深さ・ M の誤差は最近の地震より大きいかもしれないが, 傾向はつかめるだろう). この観測事実から, 慶長九年十二月十六日の日中に四国東部～紀伊水道方面で $M6$ 前後の地震が複数起これば, 少なくとも1つくらいは京都で震度3前後の揺れを生じたと考えられる.

しかし, §2で述べたように, 当時の京都の7点の日記には地震記事がない. したがって, 『大變年代書記』が記す津波当日昼間の「前代見聞の大変」の「大地震」は, それが事実であった場合, 石橋(1983)が推測したような津波生成の大規模断層運動に直接つながるものではなく, 夜の津波とは関係なく「偶然に」発生した宍喰直近の局地地震活動だったと解釈され

る。宍喰付近は、特別に上部地殻内地震活動が活発とか、群発地震活動常習域というわけではないから、これは地震学的には非常に稀な「偶然」だと考えられて、記述自体の信憑性も疑われる。

なお、元文二年(1737)に書かれた**史料5**は、30年前の宝永地震津波のことを簡単に述べたあとで慶長津波について、「願行寺辺の六地藏のもとに古き石あり、其の時のことあらあら刻記せりといへども、石の上下欠損して文義全からず、慶長十乙巳年正月に記せる年号明らかなり、その文の中に半時ゆりと書けり、その上の文は闕けたり、しかれば此の時も地震せる歟」と記している[猪井・他(1982;p.171-172);読点を追加]。貴重な記述だが、断片的な二次情報なので、本項の議論の参考にはなりがたい。

4.2 津波の時刻に関する疑問

図2の傍線Bに「酉の上刻月の出の頃より大浪海底すさまじく」とあるのが、津波来襲を表わしていると思われる。しかし、十六日の「月の出」は19時半頃であり、「酉の上刻」(17時頃)とは内部矛盾がある。これは「戌の上刻」(19時頃)の単なる書き間違いかもしれないが、そうだとすると、津波来襲を「亥刻」(21~23時頃)とする史料も複数あるから(例えば §5参照)、わざわざ「上刻」をつけるのは、少し早すぎるのではないかと思われる。

なお**史料5**は、「その昔の大変は、慶長九甲辰年十二月十六日戌刻洪波来たる、浦は勿論正田村まで一家も残らず、人死すること夥し」「その洪涛、十六夜の出月を隠して山より高く込み入りける、浜辺に竹藪の有りける所にて波一ツ折けるにこそ、その勢すこしは弱くなれり(後略)」という伝承を書いている[猪井・他(1982;p.171-172);読点を改変]。これによれば津波来襲は20時頃であり、傍線Bの「酉の上刻」とは異なる。

4.3 津波来襲時の現象に関する疑問

津波が来襲したとき、図2の傍線Cにあるように「惣所中の泉より水わき出る所二丈余上り、其の外地さけどろ水わき出」て、言語を絶する大変だったという。けれども、村中の泉から水が二丈(6m)余噴き出すことは(誇張を差し引けば)あるとしても、「地さけどろ水わき出」すというのは強震動による液状化のごとき現象であり、津波襲来時に生ずるのは不自然である。しかも、仮に地面がそのような状況になったとしても、押し寄せる津波に覆われて見えないはずである。現象の

前後関係を間違えて書いたといえればそれまでだが、実体験者の筆による記述とは到底思えない。

史料5は、「慶長の大変こそ言うもおろかや、波の入前つがた、所々の井の水おのずと乾き、湊口より水床の沖まで乾きて、水一滴もなき干潟となりけるとぞ」という言い伝えを記しているが[猪井・他(1982;p.171);読点を追加]、このほうが事実に近いように思われる。ただし、(たぶん夜目に)この状況を見た人が無事に逃げおおせたために言い伝えが残ったのだろうか。なお、本論文では宍喰の津波の詳細に関する検討はおこなわないが、上記の言い伝えは津波初動が引き波だったことを示唆している。前項で見た図2傍線Bの「大浪海底すさまじく」という表現も、引き波と矛盾しないように思われる。

4.4 過大だと疑われる死者の数

図4に、旧宍喰町<ししくいちょう>(2006.3.31以前)の集落分布の概略(a)と、本津波の推定被災域付近の拡大図(b)を示す。文化十二年(1815)完成の徳島藩撰の地誌『阿波志』[例えば石橋(2018)参照]によれば、旧宍喰町域には海浜の宍喰浦(支落、那佐)のほかには窪(久保)・日比原・尾崎・芥附<<ぐつけ>>・広岡・小谷<こだに>>・角坂<かくさか>>・塩深<しおふか>>・船津・久尾<<お>>の10ヶ村があった(図4a)。

慶長九年大津波の津波高として村上・他(1996)は5~6mを推定し、石橋(2014)もそれを踏襲したが(図1)、図4bでは参考までに標高10mの等高線を太破線で示した。また図2で網掛け太字にした寺院等の位置も示した。

さて、図2の傍線Fに「自他共惣人数一千五百余人と申し候」と書かれているのは、その前からの続きとして、宍喰における死者の総数だと解される。宇佐美・他(2013)はこれを採用して宍喰で「死1,500余」としている。しかし山本・萩原(1995)は、『阿波志』にもとづいて文化年間(1804~17)の宍喰村の人口を表掲して総数1,637人とし(芥附が抜けており、正しくは1,720人)、死亡総数1,500余では宍喰村全滅に近い数字となり、疑問が残るとした。

だが、この1,720人は前述の宍喰浦プラス10ヶ村の合計である。図4aからわかるように、この中の芥附・広岡・小谷・角坂・塩深・船津・久尾は宍喰川の上流ないし山奥で津波の被害はありえない。それら以外の、浦・窪(久保)・日比原・尾崎(70人、津波が到達するかどうかも疑問)の人口を合わせたものは1,228人である。慶長九年よりは200年も後だが、慶長五年(1600)

4.5 記述全般に関する疑問

図2の傍線Eの「当寺且中流死人数老若四十三人、大日寺且中二十三人、真福寺且中九人、長福寺且中六十一人」という各寺の檀家ごとの死者数が、「第二度目書き記す。八ツ時宥真同道にて町筋にて書く也」「慶長九年十二月十七日 未刻之れを記す」という部分に書かれているが、山本・萩原(1995)が指摘したように、前夜古城山に避難し、翌日の八ツ時(14時頃)に下山する道中で死者の細かい数字がわかるはずはない。傍線Dの「第一山野凌ぎの内ほうろくにて食煮煮焼して命をつなぎ申し候」や傍線Gの「其の節久保の在所の内にも二ヶ所惣つかにいたし死人埋め申し候。云々」がここに書かれているのもおかしい。

また、「第四 十九日同刻の時分なり」(「同刻」は四ツ時)の部分に、什物の「くわんす(かんす[鐘子];青銅などで作った湯沸かし、茶釜)」を「十二月廿日七ツ時に掘り出し」(傍線H)とあったり、「越年より明年迄の内、色々のせんぎ事これある事」(傍線I)とあったり、「第五 廿二日五ツ時に承り候て書き記すものなり」の部分に「翌年の四、五月迄はなにかくのさわぎにて候」(傍線J)などがあるのも不自然である。そもそも「翌年の四、五月迄は」は、冒頭の「乙巳正月廿一日に相尋ね書き記し候」と矛盾している。

山本・萩原(1995)は、この「乙巳正月廿一日に相尋ね書き記し候」を前提として、書き方は混乱しているが、死者数は偽りとは言い難いし、ほかにも筆写時の混乱だろうという趣旨の見解を述べている。しかし、書記の日時が殊更に細かく書かれているのに記述内容と矛盾しているのは、釈然としない。

円頓寺は徳島藩から駅路寺に指定され、十石の寺領を与えられていたから[例えば、宍喰町教育委員会(1986)], 寺男のような者も複数いたと思われる。そのような人々の様子や生死がまったく書かれていないのは、手記のリアリティーがないように感じられるが、身分制社会では不自然なことではないのだろうか。そもそも、昼間から大地震で大変だったのに人々が油断し、不意に津波に襲われて1,500余人もの死者が生じたという状況全体が不自然であり、いずれかの記述が事実と異なるのではないかと疑われる。

4.6 『宥慶之旧記』全般に関する疑問

石橋(2018)は、『宥慶之旧記』に含まれる永正九年(1512)の宍喰浦洪浪記事(当浦成来旧記書之写)の問題点を論じた際、そもそも『宥慶之旧記』全体にも幾つかの疑問点があることを指摘した。『当浦成来

旧記書之写』は『大変年代書記』に続くもので、冒頭の2行だけを図2の最後(二重傍線以下)に示した。

疑問点とは、(a) 冒頭(図2の最初)に元文四年(1739)三月十四日付で、宥慶の旧記等を円頓寺の鼠の巢の中から取り出して本紙(原本)のとおり書写したとあるが、慶長十年(1605)頃の膨大な古記録が1739年まで鼠の巢の中にあつて(いつ頃から「鼠の巢の中」に放置されたのかは不明だが)、鼠害に遭わずに詳しく読めたのは不自然ではないか、(b) 冒頭に「円頓寺開山住持宥慶」と書いているが、『円頓寺御建立成来旧記之事』(史料3)に「当寺開山住侶泉州久米田郡久米田寺多門院一代法印快尊弟子快嚴時代也」とあるから、宥慶は開山住持ではないだろう。関係者によって誤記がなされたのは不自然である。(c) 冒頭の「円頓寺旧記出次第目録」(図2の1頁目の上段)に、元文四年春に発見された古記録8点の目録があり、それぞれが何日の何時頃に出たかが記されているのは、やや作弄的と思えなくもない、というものであった。

今回、別の記事(大変年代書記)を見たわけだが、以上の疑問は変わらない。なお「やや作弄的」という印象は、歴史学・史料学の素人のもので、仮に作弄が入っていたとしてもその要因や目的は筆者にはわからない。ただ、元文四年頃の宍喰地方の真言宗の状況を詳しく知る必要があると思われる。

4.7 小括

『大変年代書記』とほとんど同一の『慶長九年大変年代書記』(史料2)を紹介した猪井(1976)も、一連の史料を紹介した猪井・他(1982)も、これらの史料の信憑性や問題点については何も述べていない。山本・萩原(1995)は幾つかの疑問点を示したが、「細部の表現については慎重に取り扱う必要があるが、主要部は考察の対象として耐え得ると言ってよい」とした。そして、津波当日の昼間に大揺れの地震が頻繁に起きたこと、家屋の倒壊はなかったこと、地裂・噴砂現象・湧水の噴出があったことが、そのほかの被害状況とともに「判明する」と書いている。

しかし、これまで議論してきたことから、『大変年代書記』には史料としてかなりの問題があり、そこに記された自然現象が事実だと結論することはむずかしいと考える。津波当日昼間の大地震活動は疑わしい。

石橋(2018)が論じた永正九年洪浪記事に関する疑問に加えて、今回の慶長九年津波記事にも問題点が指摘されたわけで、それらを含む『宥慶之旧記』

を改めて再検討すべきであろう。慶長十年頃の有慶の筆記に問題があったのか、元文四年の書写に問題があったのかわからないが、宍喰地域の中世史・近世史・宗教史などを総動員した総合的な検討が望まれる。地震・津波・火山噴火・気象などの自然現象を含む歴史記録については、自然科学が歴史学とは違った視点から見る可能性があり、本稿が史料学的再検討の一つのきっかけになれば幸いである。

なお、『大変年代書記』の具体的で詳細な記述が架空のものだとは考えがたいが、これが作られた元文四年(1739)は1707年宝永地震津波の記憶がまだ濃厚であり(史料4によれば大日寺は半分打ち崩れ、史料5によれば真福寺は床上浸水だった)、元文二年には、2年後に『宍喰之旧記』を書写することになる真福寺の大雲が史料5に慶長地震津波についてかなり詳しく記している。注目してよいことだと思われる。

§ 5. 慶長九年津波時の宍喰周辺の地震動

宍喰周辺をはじめ四国全域に、本津波についての信頼できる同時代史料がなく、『大変年代書記』の記述の是非を確認することができないのだが、参考になる記録として「靱浦くともうら」大岩津波碑がある。これは、宍喰の東北東約6kmの徳島県海陽町靱浦(図1参照)の漁港のそばに立っている[例えば、徳島県教育委員会(2017)]. 高さ3m、幅5m、奥行き5.2mの砂岩の大岩に長軸136cmの舟形の彫り込みを作り、そこに図5のような碑文が掘られている。なお、昔は海がこの大岩にもっと近かったらしく、舟を繋いだと思われる「もやい穴」がある。また、慶長碑文の右側に、半分ほどの大きさの宝永地震津波の碑があり、左側には大岩を掘り込んだ地蔵庵がある。

慶長碑文の大意は、「慶長九年十二月十六日の亥刻(22時頃)月が白く風が寒く歩行が凍りつくような時分、大海が三度鳴った。人々が大いに驚いて手をこまねいているところへ逆巻く波が押し寄せ、その高さは十丈(約30m)、七度来襲した『大塩』だった。千尋の海底に沈んだ男女は百余人」である。猪井・他(1982)は、この碑は寛文四年(1664)に立てられたというが、詳しく調査した徳島県教育委員会(2017)は「建立年月日:不詳」としている。しかし、「後代に言い伝える為に興し奉る」と彫られているから、災害の記憶が深く刻まれた被災者たちが、亡くなった仲間を慰霊し、後世に伝えるために作ったと考えられる。

この碑文からは、前触れとなるような大地震はなく、人々がまったく無防備だったところに津波が襲来した



図5 徳島県海陽町靱浦の慶長津波碑の拓本と碑文の翻刻。左下の「施主 世話人」は隣接する地蔵尊に係わるもの。徳島県教育委員会(2017)による。

Fig. 5. Epigraph of the Keicho Tsunami Monument at Tomoura, about 6 km east-northeast of Shishikui. After Tokushima Pref. Board of Education (2017).

ことが窺える。それが、この地域の共有の記憶だったのではなからうか。これは、『大変年代書記』の津波当日昼間の「大地震にて前代未聞の大変」という記述とは調和しない。なお、紙に書かれた史料は、本稿の『大変年代書記』や以下に述べる『置文之写』のように書写を重ねて信憑性がわからなくなることがあるが、碑文・鐘銘・棟札などは記録が固定されるから、貴重である。

もう一つ参照すべき史料として、宍喰の南南西約21kmの高知県室戸市佐喜浜町くさきはまちょう(図1参照)で書かれた『置文之写くおきぶみのうつし』がある。これは、慶長大津波の際に佐喜浜(崎浜)に滞在していた阿闍梨暁印くあじりぎょういんという旅の僧が書き置いたものの写しとされ、津波の前に地震があったと記している。同時代史料に準ずるもので信憑性があるように思われているが、石橋(2019)が検討したところでは、必ずしも同時代史料とはいえず、信憑性も高くない。記述内容からみても、少なくとも強い地震動が津波前にあったとは言えない。

§ 6. まとめ

慶長九年十二月十六日(1654年2月3日)夜の中郡・西南日本太平洋岸の大津波の前に、西日本で地

震動を感じたか否かは未解明の重要問題である。それに関する重要史料と考えられる阿波国宍喰(現、徳島県海陽町宍喰浦)の地震・津波記録を検討した。記録は、『円頓寺開山住持宍慶之旧記』(『宍慶之旧記』と略記)中の『慶長九年十二月十六日大變年代書記』(『大變年代書記』と略記)である。『宍慶之旧記』は、元文四年(1739)春に宍喰の円頓寺の鼠の巢の中から見つかった慶長～寛永頃の旧記類を原本どおりに書写したものとされ、その中の『大變年代書記』は、慶長九年大津波を直接体験した円頓寺住持・宍慶が慶長十年正月二十一日に書いたことになっている。被災状況が詳しく書かれており、貴重な同時代記録とされているが、とくに、津波当日の昼間に大地震が連続したという記述が目立つ。

しかし、当時京都で書かれた7点の日記には、津波当日とその前後に地震記事がまったくない。四国東部～紀伊水道地域で発生する地震は、M5クラスでも京都で有感になるから、『大變年代書記』の記述が事実だったとしても、津波当日昼間の「大地震」は、偶然宍喰近傍で発生したきわめて局地的な浅発地震活動だと推測される。石橋(1983)が推測したような、津波断層運動に前駆したフィリピン海プレート上面やや深部の群発地震活動ではなかったと判断される。

『大變年代書記』の記述には他に問題があつて、そもそも昼間の「大地震」が事実ではない可能性もある。問題とは、津波の発生時刻が早すぎる点、津波来襲時に生じたという現象が不自然なこと、宍喰の死者の数が多すぎる点、記述全体に混乱が多く見られることなどで、実体験者が本当に被災直後に書いたのかさえ疑われる。山本・萩原(1995)は幾つかの疑問点を示しつつも、主要部は考察の対象として耐え得ると述べて、昼間の大地震の頻発などを事実だと考えた。だが、より慎重な取り扱いが必要である。

石橋(2018)は、『宍慶之旧記』中の永正九年(1512)の宍喰浦洪浪記事(当浦成来旧記書之写)についても多くの問題点を指摘し、そもそも『宍慶之旧記』全体にも幾つかの疑問があることを示した。慶長十年頃の宍慶の筆記に問題があるのか、元文四年の書写に問題があるのかわからないが、歴史学・地方史学・史料学を総合した専門家の分析が望まれる。

宍喰の東北東約6kmにある鞆浦の慶長津波碑文が、地震の前触れなしに大津波が来たという住民の共通の記憶を伝えているように思われる。しかし、慶長九年大津波の前に西日本で地震動を感じたのかどうかという問題そのものについては、後世の編纂史

料なども参考にしながら、稿を改めて論じたい。

最終稿作成時付記：「4.5 記述全般に関する疑問」の最終段落に「円頓寺は(中略)、寺男のような者も複数いたと思われる。そのような人々の様子や生死がまったく書かれていないのは、手記のリアリティーがないように感じられるが(後略)」と書いたが、図2の傍線Cの次行の「其の頃面々等も遁去る所」、その2行後以降の「ようよう面々も(中略)命からがら遁去り候」の「面々」が、「寺の人々」のことかもしれない。「面々」は、「その集団の人たち」という意味があるほか、「対等の、または目下の多数の相手に呼びかけるのに用いる」という用法がある(小学館『日本国語大辞典』)。もし「寺の人々」のことであれば、当該部分の論述は不適切であった。それと同時に、被災集落が全滅するほどの死亡率ではなく、死者1,500余人は過大だろうという本稿の考察の妥当性が増すと見える。

謝辞

徳島県立文書館の金原祐樹氏から『徳島県南海地震史料集』を、徳島県教育委員会(ご担当、大橋育順氏)から『南海地震徳島県地震津波碑調査報告書』を、それぞれご提供いただきました。2名の匿名査読者のご意見が本稿改善のために有益でした。編集担当の白石睦弥氏にもお世話になりました。これらの方々に感謝いたします。

対象地震：1605年慶長大津波

文献

- 塙保己一(編)・太田藤四郎(補)、1958、お湯殿の上の日記 九、續群書類従・補遺三、續群書類従完成會、550 pp.(1934刊の訂正3版)
- 猪井達雄、1976、慶長の津波—阿波、宍喰の古文書一、歴史研究、191号、52-54。
- 猪井達雄・澤田健吉・村上仁士、1982、徳島の地震津波—歴史資料から—、徳島市立図書館、244 pp。
- 石橋克彦、1983、1605(慶長9)年東海・南海津波地震の地学的意義、地震学会講演予稿集昭和58年度春季大会、96。
- 石橋克彦、1989、1596年慶長近畿大地震で中央構造線が活動した可能性と1605年南海トラフ津波地震への影響、地震学会講演予稿集1989年度

- 春季大会, 62.
- 石橋克彦, 2014, 南海トラフ巨大地震—歴史・科学・社会, 岩波書店, 262 pp.
- 石橋克彦, 2018, 永正九年(1512)六月九日の地震と同年の穴喰洪浪に関する諸問題—1498年明応東海地震と対をなす南海地震に関連して—, 歴史地震, 33号, 157-166.
- 石橋克彦, 2019, 1605年慶長津波を記す「阿闍梨暁印置文」の史料批判, 歴史地震, 34号, 31-40.
- 石橋克彦・原田智也, 2013, 1605(慶長九)年伊豆・小笠原海溝巨大地震と1614(慶長十九)年南海トラフ地震という作業仮説, 日本地震学会講演予稿集2013年度秋季大会, 108.
- 弥永貞三・副島種経(校訂), 1985, 義演准后日記第三, 史料纂集, 続群書類従完成会, 278 pp.
- 鎌田純一(校訂), 1973, 舜旧記 第二, 史料纂集, 続群書類従完成会, 272 pp.
- 古代中世地震史料研究会, 2017, [古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版), 最終更新日2017年3月15日, <http://historical.seismology.jp/eshiryodb/>
- 瀨瀬一起(監修), 2016, 日本付近のおもな被害地震年代表, 自然科学研究機構国立天文台(編)「理科年表 平成29年」, 丸善出版, 728-761.
- 國書刊行會(編), 1911, 當代記, 「史籍雜纂 第二」, 國書刊行會, 1-214.
- 小杉榎郎(編), 1913, 阿波國徵古雜抄, 日本歴史地理學會, 1306 pp.
- 村上仁士・島田富美男・伊藤禎彦・山本尚明・石塚淳一, 1996, 四国における歴史津波(1605慶長・1707宝永・1854安政)の津波高の再検討, 自然災害科学, 15, 39-52.
- 酒井信彦(校訂), 2006, 義演准后日記 第四, 史料纂集, 続群書類従完成会, 286 pp.
- 穴喰町教育委員会(編), 1986, 穴喰町誌, 上・下, 穴喰町教育委員会, 2146 pp.
- 田井晴代(訳), 2006, 阿波国穴喰浦地震・津波の記録 震潮記, 田井晴代, 118 pp.
- 時慶記研究会(翻刻・校訂), 2008, 時慶記, 第3巻, 本願寺出版社, 発売臨川書店, 326 pp.
- 徳島県教育委員会(編), 2017, 南海地震徳島県地震津波碑調査報告書, 徳島県埋蔵文化財調査報告書第3集, 徳島県教育委員会, 162 pp.
- 徳島県南海地震史料調査委員会(編), 2017, 徳島県南海地震史料集, 徳島県立文書館, 250 pp.
- 東京大学史料編纂所(編), 1987, 大日本古記録 言經卿記, 十三, 岩波書店, 434 pp.
- 辻善之助(編), 1935, 鹿苑日録, 第4巻, 續群書類従完成會, 414 pp.
- 宇佐美龍夫(編), 1998, 「日本の歴史地震史料」拾遺, (社)日本電気協会, 520 pp.
- 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会, 722 pp.
- 山本武夫(校訂), 1981, 慶長日件録 第一, 史料纂集, 続群書類従完成会, 236 pp.
- 山本武夫・萩原尊禮, 1995, 慶長九年(一六〇五)十二月十六日地震について—東海・南海沖の津波地震か, 萩原尊禮(編著)「古地震探求—海洋地震へのアプローチ」, 東京大学出版会, 160-251.